

令和6年度 第3回子ども部会

日時：令和6年12月6日（金） 10：30 ～ 12：10

場所：奄美市市役所 5階大会議室

参加者：30名（オンライン3名 事務局含む） 別紙名簿あり



1.参加者自己紹介

2.事務局より

○保育所等訪問支援に関するアンケートの実施について（※別紙資料参照）

- ・前回の部会を受け、保育所等訪問支援について現状把握の為、サービス実施側と、受入側の両方の意見を聴けるようなアンケートを実施予定。
- ・保育所等訪問支援事業の理解もそれぞれの事業所で違いもある為、受け入れ側が混乱しないように、地域で統一したパンフレットの作成も合わせて実施。
- ・今回、作成した案をもとに部会で意見をいただいて、今年度中にたたき台として示したものを元に、アンケートを作成。パンフレット作製及び配布を行いたい。

3.グループワーク

議題：奄美地区の子どもの支援に関わる方が感じている課題について

○保育所等訪問支援の現状と課題について

- ・最近は受け入れに協力的な機関も増えてきているが、学校への訪問はまだハードルが高いと感じている。
- ・人手不足の状況もあり、訪問できる回数自体が減ってきている。
- ・訪問先との日程や時間調整の難しさを感じている。（回数が多いと言われることもある）
- ・支援後の情報共有を関係機関で十分に行う必要がある。（モニタリングや担当者会の活用）
⇒支援後にその都度、必ず保護者や支援先、相談支援専門員へ報告を提出している事業所もあった。
- ・保護者を通じて情報確認していたが、直接支援先と確認するとその内容の差異があったということがあった
- ・学校や保育機関が福祉制度について知らないことが多い。
- ・受け入れ先に目的や意義が理解されていないと感じることがある。（たとえ理解されても異動などにより継続的な支援や関係を築きにくい状況がある。
- ・支援に関する想いのズレを感じることがある。（学校や保育機関では、本人に対する個別の関りを求めているように感じる。支援に入る側は集団の中でどのような困り感があるのかということを知りたい）
- ・不登校児の支援で、事業所には通えている状況について、ヒアリングしたいとこのことで学校に呼ばれていった際に、窓口の先生は積極的だったが、管理職にそっけない態度を取られたという事例報告が事業所からあった。せっかく連携を取ろうとし

ているのだから、もったいないなと感じた。

- ・指導的な支援を受けたことで、受入れ先の職員が来られなくなったという事例があった。
- ・今年度報酬改定により、「30分以上」という下限が設けられたため、訪問する側としては、支援に入りやすくなった。
- ・時間調整が大切だが、支援に入る側、受け入れる側それぞれに、通常の流れに影響が少ない時間帯に違いがあり、難しいと感じることがある。

【課題解決のための提案】

- ・誤解を生んだりせず、連携を図っていくために目的をしっかりと共有し、合意形成しながら進めることが、目的達成の近道になると思う。
- ・本人や保護者の状況についてしっかりと理解し、共有することでズレが少なくなると思う。
- ・支援に入る側もしっかりと福祉サービスについて理解して、学校や保育機関に説明できるようにしていく必要がある。
- ・送迎時など、少しの時間も活用しながら、情報交換できる時間を確保することも大切。

○保育所等訪問支援に関するアンケート及びパンフレットの作成について

- ・「アンケートを取る」その上で「パンフレットを作成、配布する」という手順で、理解を図りながらそこに合わせた資料作成していくという今回のような取り組みは非常に有効だと思う。
- ・先行的に同様のアンケートを実施した地域でもやはり、「学校側に保育所等訪問支援の目的が理解されていない」や「日程調整が強引だと感じた」などお互いが、負のイメージを持ったまま取り組んでいるような状況も意見として出されていた。
- ・先行地域では、先のアンケート結果を受けて、支援を提供する側として、伝え方や介入の仕方の工夫について教育委員会と協力してやっていこうというような動きも見られた。
- ・地域によっては、特別支援学校が行っている巡回相談や県の療育等支援事業の担当者が年度初めに顔を合わせて、支援に入っている状況の確認や、支援方針に関する共通理解などの機会を取っているというような地域もある

【課題解決のための提案】

- ・統一したパンフレットを作成することで、これまでそれぞれの事業所ごとに行っていた手順や支援の目的などについて差がなくなると思う。学校としても見通しをもって受け入れることができるようになるのでとても良いと思う。
- ・年度当初に訪問支援に関する関係機関（巡回相談、療育等支援事業、保育所等訪問支援事業）が集まって情報共有できる意見交換会を実施出来るとよい。
- ・せっかく大切なサービスなので、お互い誤解がないように円滑に進めていくためには、まず支援を行っている関係者が集まって共通理解できることが大切だと思う。
- ・「支給決定」「提供時間」などの文言を工夫出来ないか。（福祉サービスを知らないと分かりにくい）
- ・市町村教育委員会からも学校現場へ働きかけていただきたい。

○発達検査について

- ・各事業所で単位での心理職の確保は難しい状況がある。
- ・不登校児の増加に伴い、ニーズも増え、対応できなくなっている。
- ・発達検査などについても学校でしっかり行える仕組みができていかないと、地域の検査機関にしわ寄せが行き、流れが滞ってしまっているという現状がある。

【課題解決のための提案】

- ・市町村単位など、行政も連携しながら専門職の確保や地域で検査できる体づくりを検討していく必要がある。
- ・学校職員が目の子どもの状態やそれぞれの困り感などについて意識を向け、経験を積んでいくことが教育の質を上げていくことに繋がる。
- ・学校教員教育現場にいる私たちの質の向上は、今後もずっと続けないといけない。

○不登校の支援における課題について

・保護者と子どもの理解について幼児期から支援を受けている方は比較的受け入れは良いが、小学校の中学年くらいが支援を受けている場合、本人も保護者も支援を受け入れにくいなどズレがあることが多い。

○多職種による連携について

・連携のための会議を重ねていくことで、お互いの距離感が近くなり、連携が取りやすくなるという事例も出された。

○発達障害のグレーゾーンの子どもの進学と就労について

- ・発達障害と思われる生徒が、高校卒業して就職しても、すぐに離職して島に帰ってくるという事例が多い。
- ・高校時代に特性が見えていたとしても、本人や家族に説明しづらい状況もある。
- ・中学校までの出来るだけ早い段階で支援の必要性や特性について、本人や保護者に理解してもらう必要がある。
- ・療育ネットワークなど地域の活動に参加している場合、先輩の保護者から体験談を聴く機会があるが、受入れが難しいと情報は入りにくく、機会が少なくなっている。
- ・早い段階で情報提供ができなくても、適切な相談機関を知っておくことで、必要なタイミングで必要な情報提供できるとよい。

○情報提供

- ・以前の子ども部会でも「Q-SACCS（キューサクス）」という地域診断ツールを紹介した。県内の市町村にて紹介している。
- ・地域によってはすでに取り組んでいるところもあり、事例発表も兼ねた検収会も開催している。
- ・この取り組みを行い、地域の強みや弱みが客観的かつ具体的に見えることで今後の方針を決めていくのに役に立つと感じている。
- ・先行地域の取組として、子ども部会で「Q-SACCS」をつけて、市町村の担当者に確認してもらうというような取り組みをしている地域もあった。（もしよければ奄美地区でもこの取り組みもチャレンジしていただきたい。）

【グループ】

1G

- 奄美市教育委員会
- 大島特別支援学校
- 名瀬小学校



2G

- 聖隷かがやき①
- ハートリ八龍郷
- 瀬戸内町保健福祉課
- 龍郷町保健福祉課



3G

- あすなろ
- 聖隷かがやき②
- チャレンジドサポート奄美
- あゆみ
- 大島北高校



4G

- OnYokki①
- のぞみ園
- ていだ
- 名瀬保健所①



5G

- OnYokki②
- 愛かな
- はごろもの郷
- ヒマワリクラブ
- チャレンジドサポート奄美



6G

- あんだんて
- 聖隷かがやき③
- みらいはうす
- 笠利いきいき健康課
- 名瀬保健所②



オンライン

- ここ園
- 県子ども総合療育センター
- ぴあリンク奄美

